

『東方』二七六号より

謎多き四川古代文化

解明の試み

伊藤 清司（慶應義塾大学名誉教授）

四川省成都北方の三星堆の発掘は、それまで話題にのぼることの少なかった巴蜀の古代に、俄かに人々の関心をひくようになった。二つの遺坑から黄金の杖、両眼の凸出した大型の青銅面具、マスクット・マスコイド類の金面罩銅人像、枝という枝に鳥の止まる四メートルに近い青銅製樹木等々、かつて例をみない、しかも夥しい数量の珍器が、それもなぜか破壊され火をかけられた異様な状態で発見された。埋納の時期はおそらく殷周交替期の前一一〇〇年前後。そのうえ、この文化の荷い手は杳として行方知れずである。本書は早稲田大学長江流域文化調査隊のリーダー役の著者が、その謎を解明すべく、古代四川文化の復元の試みと格闘した成果の一端である。

著者の言を俟つまでもなく、古代巴蜀の研究は文献が極度に不足していて、考古学、民俗学など隣接科学との協業なしには深化は困難である。そのため、著者は十年来精力的に現地を遍歴し、関連する遺跡に立ち、数多くの出土文物も実見した。外国人による中国での現地調査、とりわけ僻地や少数民族地区でのそれは想像以上に障碍が多く、したがって獲られる民俗学的成绩に限りもある。また四川大学などの協力があつたとはいえ、考古学的知見と文献記述との対応は限定的であるのが常で、況して確かな史料の極端に乏しい古代巴蜀では、それは猶更のことであろう。そうした困難な状況を考慮すれば、本書に盛りこまれ

古賀登著

『四川と長江文明』

A5判・三八四頁・東方書店・四、八〇〇円



た諸成果は尋常なものではない。

本書はまえばきに続く「都広の野——四川と長江文明」と題した本論と「杜伯国考」、「巴人と賁人」の二篇の補論、巻末の古代巴蜀略年表から構成された大冊である。主体の本論は下記の一〇篇。

巴蜀行 石紐探訪 蚕陵行 謎の戈基人 宝墩遺跡発掘 魚鳧考 杜宇考 鯀・禹・鼈靈
巴人と蜀人 巴蜀と日本

「歴史」の舞台現場や見聞した出土文物その他を文献記述（その多くは神話伝説類）と相互照射させながら、著者が古代の巴蜀像を塑像していった経緯が、右の各篇のタイトルからも窺えるのだが、論及は多岐多領域に亘っていて、評者の限られた能力と僅かな紙面では、本書の全容を到底尽くせるものではない。この点を前もってお辞りして

書評の筆を進める。

さて陳寿の『三国志』蜀書以前の歴史を扱った文献としては、さしずめ東晋・常璩の『華陽国志』蜀志と前漢末・楊雄の『蜀王本紀』(宋代『太平御覧』巻八八八所引)だが、その『華陽国志』は

周、紀綱ヲ失シ、蜀、先ズ王ヲ称ス。蜀侯蚕叢有リ。其ノ目ハ縦。始メテ王ヲ称ス。死シテ石棺石槨ヲ作ル。国人之ニ従ウ。故ニ俗ニ石棺槨ヲ以テ縦目人家ト為ス。次王ヲ柏灌ト曰イ、次王ヲ魚鳧ト曰ウ。魚鳧王ハ湔山ニ田シ、忽チ仙道ヲ得タリ。

と述べて、蜀の最初の国王が蚕叢、次に柏灌、続いて魚鳧が位に即いたとする。これに対して『蜀王本紀』は

蜀王ノ先、名ハ蚕叢、後ノ代、名ハ柏灌(柏灌)ト曰ウ。後ノ者、名ハ魚鳧、此ノ三代ハ各々数百歳、皆神化シテ死セズ。其ノ民亦頗ル王化ニ随ウト去(云)ウ。「魚鳧」王ハ獬シテ湔山ニ至リ便チ仙去ス。

と誌す。蚕叢以下の三王はここでは蜀の地で交替した三つの王朝の創始者とされているが、著者はいずれも実在の王ではなく、神話伝説上の存在にすぎず、実際は蚕叢は蜀人が奉祀した蚕神、魚鳧はこの地で鵜飼を営む氏人たちが奉斎した祭神であって、蚕叢、柏灌、魚鳧とは要は蜀に古くからあつた養蚕文化、柏樹信仰、鵜飼文化を物語つたものであると主張している。

歴史上の初代の蜀王は帝堯唐陶氏の末裔とされる唐杜氏の杜宇(著者は宇を宇宙の意とする)で、その禪譲をうけた鼈霊・開明によつて最初の王朝が誕生した。その開明王朝が周の慎靚王五年(前三二六)に秦の恵文王の侵攻によつて一二代で滅亡したのは史実であるが、『華陽国志』、『蜀王本紀』ともに杜宇、鼈霊に関する記述は伝説的要素が

▶ トップページにもどる

多い。楚の鼈霊の屍が長江を遡り蜀に至つて蘇生し、蜀王に仕えて大臣となつたが、偶々大洪水が起こるや玉壘山(玉山)を決壊して水害を治めた。杜宇は鼈霊の非凡を察し、彼に政事を禪つて西山に隱遁したと伝えられている。これは山西省などにも伝わる蹴裂き型の禹の治水伝説や堯舜禹の禪譲説話を連想させる物語である。

ところで著者は巴蜀古代文化は、嫫祖、蚕叢王、馬頭娘各伝説にみられる養蚕文化、柏灌王伝説の中に窺える柏樹信仰、魚鳧王伝説が示す鵜飼文化、杜宇伝説が物語る太陽信仰、開明鼈霊伝説に認められる霊亀信仰、禹の石紐伝説が明らかにしている聖石崇拜等々、巴蜀の地ないしその周縁地域に由来するさまざまな文化や信仰が温潤温暖な稲作地帯である都広の野(四川)で早くから習合し、発展した文化だと説いている。そのうえで三星堆出土の各種遺物にもそれらを看取することができるという。たとえば長さ一・四メートルの黄金の杖。これには魚を射抜いた矢に鳥(鵜とされる)が止まり、その下方に冠?をつけ口を大きく開いた人面の図紋がある。通説では魚鳧国の王権を象徴する宝杖だとされるが、著者は中国には古来多様な杖の文化はあるものの、国王が杖を権力の表象として持つ慣例は絶えてないとしてこれを斥け、それは四川の水辺で巫祝が豊漁祈願に用いた呪杖であると説いて、当時すでにこの地で鵜飼習俗が存在した証しであると強調している。

鳥の止まる巨大な青銅製樹木は三星堆地方に太陽信仰が盛んであつたことを物語ると解く。『山海経』海内経に黒水、青水(ともに岷江支流の黒水と青衣水だとする)ノ間……九丘有リ。水ヲ以テ之ヲ絡ラス。名ヅケテ陶丘ノ丘ト曰ウ。……木有リ、名ヅケテ建木ト曰ウ。大皞爰ニ過リ……。

とある建木は『淮南子』^{『淮南子』}墜形訓に「都広ニ在リ、衆帝ノ自リテ上下スル所、日中景無ク呼ベドモ嚮無シ、蓋シ天地ノ中ナリ」の建木のそれであるとし、これは同じ『山海経』海外東経などに載っている、湯谷の上に在って太陽がそこから昇るといわれる東方の扶桑に対応する、天地の中央に屹立する世界樹であって、真昼時、大暉（太陽を運ぶ大鳥）がその上を通り過ぎることを物語っていると説いている。著者はそのうえで、長大な青銅の樹木を奉じて太陽神帝堯を祀る信仰心の篤い政治集団が三星堆の地に占拠していたと推理した。そして両眼凸出の大型青銅面具がその集団の何者かを示唆するという。飛び出した左右の眼は四方を見徹す千里眼を、大きな耳は天下の出来事を細大漏らさず聴きとる聡い耳を表わす。その偉容こそが四海に君臨する太陽神帝堯の神威を顕現している。この帝堯の子孫がほかならぬ杜宇氏であり、三星堆こそがその杜宇国の城址であったと想定している。

その杜宇国のその前後を探究したのが補論一「杜伯国考」である。同じ帝堯陶唐氏の末裔と伝えられる唐国（現・山西省）が周の成王の初め反乱を起こし、周公旦がこれを誅滅した。当時、巴蜀で威勢を誇っていた唐の類族の杜伯国を周が放置しておく筈はなかった。次の時代に杜県と呼ばれた、現在の陝西省西安市漢城に杜伯国は国替えを命じた。蜀の杜国人は止むを得ず彼らの宝器類を解体して坑に埋納し、忽々に国都の三星堆をあとにした。破壊とはいえ、遺物が比較的丁寧な埋められていたのはそのためだろうと著者はいう。なお『華陽国志』は時鳥伝説を載せている。杜宇が王位を開明に譲って西山入りしたのがたまたま春二月。そのとき杜鵑が鳴いた。このため、王を慕う蜀の人々はこの鳥の鳴くとみな悲しんだとある。著者はこれは

トップページにもどる

杜宇の隠世の悲哀ではなく、杜宇国の滅亡の恨みを伝えたものだろうという。

本書には他にも興味を唆る新説や卓見が随所に認められる。三星堆出土の青銅面具の凸目は、文献にみえる縦目人の縦目だとする通説に疑義を唱え、両者を一律に同一視できない、これは時系列的に説くべきだという指摘も卓見の一つである。しかし問題もない訳ではない。評者の謬読や誤解があつたら寛恕を請い、その二、三を挙げる。黄金の杖上の魚を貫く矢の図を弓による漁撈を示すという解釈については、昔、南太平洋のソロモン諸島でのことだが、島民が小さな川で丸木舟の上から弓で魚を射る習熟した技を観た経験のある評者は、四川にもかつて弓漁があつたかも知れないと思うが、『華陽国志』の「湔山デ田シ」たという記述を湔水で川狩りしたと理解されている点は素直には従い兼ねる。『蜀王本紀』の「獫狫湔山ニ至リ便チ仙去ス」からは河川での漁撈の様子を想像することは容易でない。水仙という語があるから、川や海で仙去することが無かったとはいえないが、山中・山上から登仙するのが一般的である。「湔山ニ田シ」の新解釈にはもつと論拠を挙げて欲しかった。

三星堆文化の終焉と杜伯国人の強制移住をめぐる著者の解説は甚だドラマチックで本書中の圧巻だが、それだけに読者に隔靴搔痒の感を抱かせ兼ねない。征討の対象にもなる三星堆の国人を周朝がなぜ九服の僻地からわざわざ王都に近い畿内に移封したのか。それは監視強化のためか、それとも優れた金属工芸技術の収奪が目的か。遷徙先とされる西安漢城一帯などから三星堆文化の名残を留める遺跡遺物の存在その他が実証的に指摘されてあれば、著者の興味深い解釈は説得力を増すであろう。

白水郎をめぐる論説、隼人の楯の逆S字紋を虎紋とする新説等々もさらに具体的な論拠が俟たれる。文献ばかりか、考古学的・民俗学的資料のまだ勘い今の段階で多くを望むことは望蜀のことといわざるを得ないが、著者および早稲田大学長江流域文化調査研究の諸氏の今後に期待するところは多大である。

四川は面積、人口ともに日本全土に匹敵する。巴蜀の天地には数千年に亘ってさまざまな民族と文化とが興廃したであろう。その多彩さは今後更に明らかになっていくに違いない。著者はその巴蜀の古代像の復元に意欲的に取り組み、敢えて多くの仮説を提示された。我々は本書によって古代四川史研究の最近の成果と問題の所在を知ることができ、裨益と刺激を得ることがきわめて多い。

トップページにもどる

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ